

令和6年度 第2回 富山県幼児教育推進連絡協議会 会議録

1 開催日時 10月22日（火）10:00～11:30

2 開催場所 県民会館 701 会議室

3 出席者（17名）

無藤 隆特別委員（リモート）

石倉 卓子委員、石田 和義委員、石動 瑞代委員、黒田 卓委員、小島 伸也委員

小林 真委員、佐々木 昭彦委員、芹澤 譲治委員、沼田 秀和委員、畠山 遵委員

羽根 敬喜委員、松井 敦子委員、宮口 克志委員、宮田 徹委員、森川 朋子委員

養藤 直哉委員

4 会議内容

(1) 開会

(2) 議事 令和6年度富山県幼児教育センターの取組について
富山県幼児教育推進連絡協議会専門部会について
令和7年度富山県幼児教育センターの取組について

(3) 閉会

5 議事

（教育次長 挨拶）

事務局 ― 白梅学園大学名誉教授 無藤 隆 特別委員は、リモート参加。

（特別委員 挨拶）

（委員長、副委員長 挨拶）

事務局 ― （令和6年度 富山県幼児教育センターの取組について報告）資料1～3

1 幼児教育の質の向上及び園内研修の充実

- ・ 幼児教育施設訪問研修は、47施設中42施設の訪問終了（10月22日現在）。
- ・ 訪問者の増員→多角的な視点からのアドバイス、事後研修の充実。
- ・ 約5割強の園（園：幼稚園、認定こども園、保育所等の幼児教育施設を指す。以下、園と表記）で近隣園からの参観あり。7割弱の園で小学校からの参観あり。
- ・ 訪問研修後、保育に対する自己評価が上昇。訪問研修が、日ごろの保育を振り返り、保育者としての自分を見つめ直す機会となっている。

2 幼児教育・小学校教育への円滑な接続の推進

- ・ 市町村幼児教育主管課と市町村教育委員会も交えて、各市町村の幼保小の接続について情報交換や意見交換を実施。
- ・ 市町村への支援として、接続の研修を提案、個別の相談にも対応。

委員 ― （幼児教育推進リーダー活用部会 部会長 挨拶と報告）資料4

- ・ 複数の園の保育を参観すること、複数のアドバイザーやリーダーと一緒に協議することで、推進リーダーとしての多様な視点を得て、気づきや学びがあった。
- ・ リーダー同士が情報交換や学びを共有する機会が少ないことが課題。
- ・ プロジェクトチームの現状把握と支援内容について協議。推進リーダーの強み、興味のある分野について学び、話や意見交換をしながら質の向上を図っていく。
- ・ 県内の園内研修の実態調査の項目について協議。来年度、調査を実施する。

委員 ― （幼児教育施設訪問等研修部会 部会長 挨拶と報告）資料5

- ・ アドバイザー、複数の推進リーダーでの訪問により、研修、協議が充実した。
- ・ 事前アンケートを生かし、園、保育者のニーズに応じた支援、助言ができた。

- ・ニーズに合ったアドバイスをしていくためには、事前の打合せ等で園とのコミュニケーションが必要。
- ・訪問研修を通して、園の組織の変化、あるいはそのリーダーシップの成長、変化といった視点も重要。

委員 — (幼児教育・小学校教育接続部会 部会長 挨拶と報告) 資料6

- ・園と小学校のそれぞれの研修会に参加し合い、互いに互いを理解しようという動きが盛んになっている。
- ・接続カリキュラムや行事等の振返りが「資料を作成して終わり」にならず、翌年に生かす取組として継続していく必要がある。
- ・幼児教育と小学校教育の違いを明らかにし、その違いの理解の上に協力・連携を進められるような接続ガイドを作成中である。合同研修会等に生かしてほしい。
- ・市町村間、教職員及び保育者間の「幼保小接続」に関する意識や知識に違いがある。

委員長 — (質問)

幼保小接続について、県内の地域での温度差があると感じる。どのくらい差があるか。

委員 — 比較的小さい自治体は、教育と児童福祉の関係者同士が顔の見えるところにいる。幼児教育施設と小学校も近いため、いつでも顔を合わせることができ、接続も進むが、合併等を繰り返して大きくなった自治体では、小回りが利きにくい部分があるのではないか。

委員長 — 幼保小接続が全県に広がっていくには、進んでいる市町村に引っ張っていってもらえるような形がとれるとよい。

委員 — 訪問研修では、事前打合せで、発達特性の気になるお子さんについて相談したところ、参観後、保育者としてどのような合理的配慮をすればよいのか、具体的な支援をアドバイスしていただき、大変実りのある研修会になったと聞いている。

接続のあり方について、子ども計画策定の中においても、今年度、初めて教育部門と一緒に、全庁挙げて考えるようになった。よい兆しである。

委員 — 訪問するリーダーの得意分野もある。事前に園のニーズや研修テーマを丁寧に把握したうえで訪問研修を行うという流れができているのがよい。その事前の取組、プロセスが、とても大事である。

委員 — 架け橋期のカリキュラムづくりについては、こちらから小学校に声をかけて、考えているところである。1つ例をつくれば、それを真似る園がある。今、小学校接続加算の制度があるので、今こそ一緒に頑張っていこうと話をしている。

訪問研修で、事前に聞きたいことを相談できる仕組みが素晴らしい。これが、もう1歩広がって、例えばネット上でもよいが、保育者の悩みにアドバイザーやいろんなところから答えを返してくれる。そういうものを目指していただけたら、本当に嬉しい。

事務局 — (来年度の取組案 説明) 資料7

1 幼児教育の質の向上及び園内研修の充実

- ・より一層、園のニーズに対応した訪問研修。

- ・推進リーダーの訪問回数を2回程度とし、訪問する園へ多角的に支援するとともに、推進リーダーの資質向上を図る。
- ・訪問研修を互いに見合う取組を市町村に提案。

2 幼児教育・小学校教育の円滑な接続の推進

- ・市町村主体での架け橋期のカリキュラム改善会議の実施に向けて支援。
- ・非認知能力の育成について講演等の研修の実施。

委員 一 訪問研修は、年々充実している。できるだけ多くの職員が研修に参加できるよう工夫している。事後の研修会では、園内の様々な意見をくみ上げ、一緒に話し合うスタイルが定着してきた。訪問研修をきっかけに、園内研修の機運を高めていると感じる。その意味でも、園のニーズに応じたアドバイザー、推進リーダーの派遣という提案は、非常に貴重である。そのためには、アドバイザー、推進リーダーの研修の充実も求められる。チームでの研修も、園の期待に応えることになるのではないかな。

委員 一 (質問)

訪問研修には、小学校からどんな立場の方が来るのか。そこでは、学校の立場で助言等もいただいたのか。

行政サイドも訪問研修に参加し、県、市町村が一緒になって幼児期の子どもたちのことを検討していくことも、これからは必要なのではないかな。

委員 一 高岡市では、公立園で訪問研修があった際は、課の担当が必ず1名は参加し、保育を参観し、その研修にも参加し、事後には園から報告をもらっている。行政としても、研修の様子、成果を確認している。

委員 一 教育委員会からも、機会をとらえて近隣園の保育を見せてもらうよう小学校に働きかけている。担任は授業があるので、管理職もしくは教務主任等が参加することが多いのではないかな。教育委員会からも、園長経験のある指導主事と一緒に、保育を参観することを積極的に進めていこうと考えている。

富山市は、小学校が現在63校、市立の幼稚園は3園しかない。これは教育委員会管轄。私立の幼稚園、保育所、認定こども園については子ども家庭部、市長部局が所管しているため、やりづらさはある。ただ、幼稚園、保育所と小学校との接続は非常に重要である。保育所等を所管している部局と教育委員会の接続担当者も交えて協議できるよう働きかけていけばよいと考える。

委員 一 互いの保育を公開する研修は、保育を行う側も見る側も、多くの学びがある。そのメリットを十分に生かして、今後も幼児教育や保育を共に語るという営みの定着をさらに図るとよい。目の前の保育を通して共に語り合うということは、保育者や保育教諭として、大きなやりがいにつながる。

乳幼児期に培った心情や意欲、学びの芽を小学校以降の教育へと大切につないでいくことは、本当に重要である。非認知能力の育成も含め、互いの現場にとっての大切なことの理解が図られるよう、研修の充実を期待する。

委員 一 小学校入学当初から環境を通して行う教育を、しっかりと保証することが非常に重要。担任に、環境を通して行う教育を実際に見てほしいが、難しい。子どもたちは、幼児教育を通してよき学び手として育っている。小学校入学と同時に、環境を通した教育と問題解決的な学習をともに推進していくことが大事。

園では生き生きしていたのに、入学と同時に授業や生活になじめないなどの事例もある。園から、短時間でも授業を見ていただき、その子どもをサポートしていただくことはできないか。園の先生方の姿を見ることは、子どもにも、担任にもよい影響を与えていくと思う。我々小学校側に、助言していただく機会があるとよい。

- 委員 一 先日の小学校の運動会で、「1年生は50メートル走を頑張ります」と。幼稚園では70メートル走だった。1年生を赤ちゃん扱いする小学校の構えが変わっていない。
- 幼・小の接続についても幼児教育の質の向上についても、先生方の働く環境も合わせて考えないと、保育者を志す若者が増えていかないのではないかな。
- 接続については、専門家の協力や一定程度の共有されたカリキュラム等を示さないと、関わる方々の負担が増えるだけになる。ぜひ、幼・小の接続等の支援が確立されて、親が安心して地域で子どもを任せられる環境づくりを進んで行っていただきたい。

- 委員 一 小学校の入口は、親も子どもも不安。園から小学校へうまく接続されるとすごく助かる。接続についての研修には、誰が参加するのが一番よいのか、その対象を考慮してほしい。ただ、多忙で、参加が難しい現場の状況も理解できる。そのために、人員の増員等の支援、サポート体制があるとよい。
- 保護者は、こういう考え方で幼児教育をやっている、こういうシステムが確立されていることをなかなか理解できない。保護者と教育現場側の温度差から誤解が生じる場合もあるのではないかな。その解消のためにも、保護者への取組の周知等を行っていただければと思う。

- 委員 一 訪問研修の事前アンケートに答えることによって、研修に入る前の自分自身の課題に気付くことができ、内容的に非常に素晴らしい。
- 園の規模や人員の問題等が原因で申し込めない園に対してのアプローチを考えていく必要がある。
- 遊びの重要性について、我々から見ると無意味なように見えることも、子ども自身は深く考えている。それを見極める大人の視線が非常に大事である。

- 委員 一 センターの取組で第三者が園に入ることによって、保育者の資質を高めるための斜めの関係ができ上がってきている。悩んでいることを相談できる人が増えて、保育者にとって本当によい取組であり、また、どんどん内容が深くなってきている。
- 小学校を交えての協議会は、「幼児教育」や「環境を通して行う保育」を語るチャンス。子どもの無限の可能性をたくさん発見していただけるのではないかな。

- 特別委員一 様々な課題があるが、特に協議に出てきたことについて、3点話したい。
- 1つは市町村の、自治体の中での体制について言及があったが、基本的には特に幼稚園、保育所、認定こども園、公立、民間がともに取り組む仕組みを、まず自治体の中で作らないと動かない。その上で、小学校とつながるということを、県の権限ではないと思うが、強く働きかけて欲しい。
- 2点目は、研修のあり方。研修自体の量的な部分はもう相当に実現してきた。そこで、課題が2つ、3つある。そこに、幼児教育センターとして、随分踏み込み始めているのはよい。例えば、園内研修の広がりとか。園のリーダーを、いくつかの園をベースにして、その人たちの小規模研修をさせてもらう。それを公開保育につなげる。あるいは、プロジェクトという形でテーマ研修をする。与えられた研修ではなく、自分から何が必要かを考える場として有効であり、また往還型と言われる、学んだこと

をどう現場で生かしていくか。幼児教育センターの方向として、非常に重要だと思っている。

3点目。文科省の教育課程等の検討会の最終報告から。小学校、保護者の幼児教育・保育の理解がまだまだ不足している。また、園も、必ずしも要領・指針の趣旨を把握しきれていない面もある。それをどう広げるか。文科省の「遊びは学び、学びは遊び」の短い動画のように、分かりやすく伝える工夫が必要。

また、その検討会の中で、幼児教育と小学校の接続の取組について、大事なことははっきりしてきた。1つは幼児教育・保育側と小学校側の体制の問題、組織の問題。園側にも小学校側にも、接続または架け橋の担当者を必ず置くということが必要。それと共に、小学校内に研修や分科会等をつくり、全校で理解できるようにする。架け橋は、余分な仕事ではない。幼児教育が頑張ってきたことが、小学校以降に生きてこそ、子どもたちのためになる。

とにかく互いに授業、保育を見合うということが接続の始まり。小学校の先生にとっては、「環境を通して」や「10の姿」は、言葉としては理解できるだろうが、具体的には見ないと分からない。幼児教育側も、小学校の授業の様子を見る。学習指導要領が変わっていく中で、特に今、個別最適等新しい試みが増えてきている。そういう小学校の現在の様子を把握するとよい。

その上で、今、幼児がしている面白い活動を発展させると、小学校のどの教科でどんなことにつながっていくかを構想することが、架け橋の始まり。幼児教育の専門家として、園でここまでやってきたから、小学校でこの辺りを生かしてもらえないかということを伝える。

もう1つは、1年生の1年間、すべての教科で架け橋の構想を考えましようと言っているが、小学校の教科の単元の活動、課題の芽生えは幼児教育にあるということである。単元計画の中に幼児期の姿を入れるとよい。それをさらに発展させていくために、幼児教育側が、小学校の教科書を1年間見てみる。例えば、算数の教科書には、いきなり数式の計算があるわけではなく、学校生活の中でいろいろの数を見付けていくなどの算数的活動があり、それらを見ると、園でもやっていると思う。また、図工には、粘土を用いた造形遊びがあるが、粘土遊びは幼児教育でもやっているのが普通。小学校には10の姿を提示してあるので、10の姿をもとに園でのいろいろな活動を見直してみる。すると、活動の中に、子ども同士の話し合う姿等いろいろな姿が、同時に、重なって見えてくる。10の姿の育ちがあちこちにあるということが見えてくる。そういう地道なやり方によって、幼児教育の成果を小学校側で活用する段階に進むとよい。

(センター所長 挨拶)

(終了)